

2020年12月6日 久宝教会 待降節 第2主日礼拝

メッセージ「どうしてこんな所に生まれたのか」

牛田匡牧師

聖書 マタイによる福音書 13章 53-58節

新型コロナウイルスの感染者は全国で増え続けていますが、大阪でも先日より「医療非常事態宣言」という新しい言葉が作られて、再び春のように「不要不急の外出は控えて下さい」と言われるようになりました。とりあえず15日までと言う事ですが、その後もどうなるのかは分かりません。感染者が増えたことで、重症者も増え、重症者を受け入れられる病院が^{ひっばく}逼迫しているとのことです。医療の現場で、春からずっと緊張の中にいる医療従事者の方々には、本当に頭が下がりますし、その働きが守られますようにとお祈りしています。

そんなコロナ禍の中、私たちはクリスマスを待ち望むアドベントを過ごしています。今年のアドベントやクリスマスは、一体どうなるのでしょうか。保育園では毎年恒例となっている降誕劇、ページェントや、クリスマスの歌などを、子どもたちが練習していますが、人数を制限したりして、これまでとは違うクリスマス会になりそうです。もしかすると、教会でも春のイースターの時のように、会堂に皆が集まることなく、それぞれの場所で礼拝を守ることになるかもしれません。しかし、そのような具体的な対応のことではなく、今このコロナ禍の中で、アドベントやクリスマスを迎えるということは、私たちにどのような意味を持っているのでしょうか。

今日の聖書のお話は、イエス様が「故郷のナザレで受け入れられない」「故郷の人々の不信仰」というような小見出しが付けられる箇所でした。そんなお話が何故、クリスマスを待ち望むアドベントの時期の聖書日課として割り当てられているのでしょうか。それは恐らくクリスマスを迎えるにあたって、教会に連なる自分たち自身が不信仰に陥っていないかどうかを、反省して顧みるためではないかと思います。しかし、今年もまたその

ような理解でこの聖書を読んで良いのでしょうか。

そもそも毎年クリスマスをお祝いするのは何故でしょうか。何故、毎年同じような賛美歌を歌い、同じ聖書のお話を読むのでしょうか。それは私たちがクリスマスの意味を忘れてしまうから、それを心に留めておくようにするためでもありますし、また社会状況が日々変わってゆき、私たち自身も変わってゆく中で、このクリスマスの物語が示してくれるもの、この物語を通して見えて来るものが異なるから、ではないでしょうか。そのように考える時、今日の聖書のお話から見えて来るものは、一体何でしょうか。

まず「イエスはこれらのたとえを語り終えると、そこを去り、故郷にお帰りになった」とあります。『マタイによる福音書』13章では、イエス様はガリラヤ湖の湖畔にて、人々に対して「種蒔きのたとえ」や「毒麦のたとえ」などを話されて、その後、故郷であるナザレの村に戻られた、と記されています。イエス様の生まれ育った故郷の村ですから、当然周りの村人たちは、イエス様のこともその家族のことも良く知っていました。

そして、ナザレの人々は言いました。「この人は、このような知恵と力をどこから得たのだろうか。この人は大工の息子ではないか。母親はマリアと言ひ、兄弟はヤコブ、ヨセフ、シモン、ユダではないか。姉妹たちも皆、私たちのところにいるではないか。この人はこれらすべてのことを、一体どこから得たのだろうか」(54-56)。聖書協会共同訳を読むと、人々はイエス様の知恵と力に驚きつつも、イエス様の幼少期も家族も良く知っていたために、信頼することが出来なかった、という人々の不信仰の話として読めますが、本当にそうでしょうか。

この話はむしろ、イエス様が故郷のナザレで、差別されていたということを示しています。まず55節の「大工の息子」という表現ですが、日本語の「大工さん」というと、家を建てる職人さんのことですが、聖書の中では「家造り(オイコドモス)」という言葉は別の言葉で、ここで「大工」と訳されている「テクトン」という言葉は、元々は「刻む人・切る人・彫る人」

という意味です。そこから木工や石工の職人と考えられて来ました。しかし、木造建築で家を建てる日本と違い、パレスチナ地方の家は、石で造ります。木は扉や窓枠、そして家具などの家財に使われていたと考えられています。パレスチナには木材資源を得ることが出来る豊かな森林はなく、ヘブライ語聖書の時代から、大きな材木は外国からの輸入品でした。

「ぶどう園の労働者のたとえ」に記されているような、広場でその日その日の日雇い仕事に雇われるのを待っていたのが、イエス様自身の経験に基づくものだったと考えると、釜ヶ崎の本田哲郎神父が指摘されているように、イエス様も、その父親のヨセフも、高級品であった木材の加工職人であったというよりは、^{たがね} 鑿 と ^{かなづち} 金槌 で石のブロックの大きさや形を一つ一つ整えていくら、という出来高払いでその日の日当を稼いでいた石工職人、石切りだったと考える方がふさわしいように思います。そしてそれは石の粉にまみれて、^{じんぱい} 塵肺 を引き起こす危険な仕事であり、人々から避けられていた被差別の仕事でした。

さらに続けて「母親はマリアと言い」とあります。当時のユダヤ教世界では、父親の名前を出して「〇〇の息子」と呼ぶのが普通でした。^{かか} にも拘わらずに、ここでは父親のヨセフの名前は挙げられずに「大工の息子で、母親はマリア」と記されています。同じお話が記されている『マルコによる福音書』では、定冠詞を付けてわざわざ「あのマリアの子」とまで書かれています。つまり、イエス様の生まれが、普通じゃない、^{いわ} 曰く ありげな事情がある、と周囲から見られていたということでしょう。それは、マリアがヨセフと正式な結婚をする前から妊娠した、イエス様を身ごもったということであり、そんなマリアと一緒にになったヨセフもまた ^{けが} 穢れた 罪人 として、周囲から差別され、奇異の目で眺められたということでしょう。

そして「この人は、このような知恵と力をどこから得たのだろうか」という人々の言葉の背後には、「貧しくてお金も時間もなく、ユダヤ教の教師、ラビの下で学ぶなんて出来ないはずなのに、どうして」という ^{さげす} 蔑み と、驚きが込められていたのだと思います。

「どうしてこんな所に生まれたのか」……。この言葉は、それこそ被差別部落に生まれた人たちや、在日外国人の人たちにとっては、物心ついた時からの一生涯の問いではないかと思います。そしてそれはイエス様についてもまた同様でした。クリスマスに生まれた神の子、この世界の救い主は、どうしてこんな所に生まれたのか……。その答えは一つではありません。毎年迎えるクリスマス。毎年読み返すクリスマス物語を通して、私たちは救い主、神の子の誕生物語と毎回、出会い直します。イエス様はどうして2000年前に、差別され虐げられた存在として生まれたのか。

「どうしてこんな所に生まれたのか」……。この問いは今日の私たちの置かれている状況で言えば、「どうしてコロナになったのか」という問いも同じでしょうし、その他にも「どうしてあの事故、災害に遭ったのか」という問いも同じではないでしょうか。私たちはその問いに対して、それぞれの方がその生涯をかけて、その時々^{こんにち}に答えを見つけて行きます。神様はどこにいるのか。神様は全ての所にいつでもおられると共に、漫然^{まんぜん}と誰とでもいるのでもありません。神様は弱く小さくされている人たちの所に、この社会の中で困窮している人たちをこそ優先して選ばれ、そこに共におられます。

私たちはそこに連なっているのでしょうか。まぶねの中に眠るイエス様と、どこで出会おうとしているのでしょうか。コロナ禍で迎えるクリスマス。私たちは今どこに誰と共にいるのか……。私たちは、神様に導かれながら、このアドベントの時期を過ごしていきます。